

II-2

多発性骨髄腫における FDG-PET 検査の有用性

浅井隆司、片岡圭亮、半下石 明、高橋強志、本倉 徹、黒川峰夫

東京大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科

【目的】多発性骨髄腫の病期分類として Durie & Salmon (D & S) 病期分類が長く用いられてきたが、2003 年に多変量解析に結果に基づき発表された国際病期分類 (ISS) は Alb と 2MG という臨床検査値のみで層別化するものであり、骨病変等の骨髄腫に特徴的な因子は含まれていない。近年、MRI や PET 検査による画像診断の進歩に伴い、これら画像診断による病変数に基づき D & S 病期分類を改変する試みがなされている。今後、骨代謝マーカー、臨床検査値に加え、これら画像診断を組み合わせ、より正確な臨床病期診断や活動性病変の評価が可能になると考えられている。今回私達は全身骨のスクリーニングならびに髄外病変の評価の目的で、様々な病期の多発性骨髄腫症例で FDG-PET 検査を行い、その診断における有用性を検討した。

【対象/方法】当科にて経過観察中の多発性骨髄腫 8 例で FDG-PET 検査ならびに全身骨 X 線検査を施行した。症例は年齢 58 歳から 82 歳、ISS 期 5 例、期 1 例、期 2 例であった。

【結果/結論】全身骨 X 線検査では 8 例中 4 例で溶骨性病変を認めるのみであったが、FDG-PET 検査では局所的骨病変を 4 例、び慢性骨病変を 4 例、髄外病変を 2 例で認め、8 例中 6 例で何らかの明らかな異常を認めた。特に胸壁に認められた髄外病変 2 例は全身骨 X 線検査では検出不可能であり、活動性病変の評価における FDG-PET 検査の有用性を示唆するデータであった。